

貰いたいというお話が、当時の福間センター長からあり、喜んでお引き受けした次第である。

立ち上げ頃

千葉県がん登録は昭和50年に発足した。登録室は図書室の一角にあり、スタッフはほんの2~3人ほどで、学校を卒業したばかりの初々しい高山さんがそれ以来、ヌシとなった。電算システムなどは全て自前で構築したので、随分安上がりでできあがったのではないだろうか。なにせ今から思うと、登録業務を指導する立場にあった私自身が疫学の初歩も知らない人間で、少しばかり電算機のことを判る程度であったから、情けないものである。少しは登録業務に理解のあるドクターが顧問的な立場でいろいろ意見を出したりして下さるが、かえって混乱する感じで、なにもかも手探りの状態であった。それでも藤本先生をリーダーとする厚生省のがん登録研究班に参加して、いろいろ指導を受けるうちに次第にがん登録のイロハも判ってきて、標準方式にならって、形式的には整えられてきた。また神奈川県井上怜子さんに時々来て貰って、実務のノウハウを教えていただいた事もなつかしい思い出である。

苦労期

本誌の読者なら誰でもうなずかれると思うが、がん登録事業というものは、あるレベル以上に成長するまでは、労多くして功少ないものである。最初の十数年間はそれこそ賚の河原の石積みのような切ない苦労の連続であった。肝心のがんセンターのドクターが登録に関心がないし、研究所の仲間からは役にも立たないことをやると白い目で見られるし、県庁の担当課の人はようやく理解

してもらった頃に居なくなるし、といった具合である。

ところが、2代目センター長の嶋村先生がセンターを辞められた後、県庁予防課の一隅に机を置かれてから、様子が段々変わってきた。先生は日々予防課を焚き付ける傍ら、人脈を生かして県内くまなく病院を訪問してがん登録の意義を訴えて下さった。車椅子の先生に遠路来られては、どこの病院も協力しないわけには行かなくなって、次第に登録成績が上向いてきたのであった。

その後

そんなわけで、千葉県がん登録も最近10年間は、ようやく統計らしきものを出せるようになり、成果を県内で宣伝できるほどに成長したと思っている。しかしまだまだ充分と言える段階にはないし、個人情報保護問題で蹴つまづいたらひとたまりもないであろう。どうかそんなことにならないよう、世の中うまくいってくれますようにと願うばかりである。

私は今の職場でひとつのコホート調査を担当しているが、がん患者の半分は治癒する時代に、死亡の追跡だけでは片手落ちではないかという意見もある。それともう一つ、厚生省の人口動態死亡票を電算ファイルにする作業がOCR化されてから、小さな入力間違いが起きていくらしく、記録照合が完全に行かないように思われる。そういう問題のチェックにがん登録が利用できればよいがと考えている。今は個人情報保護法との関係でただちに実行できないかも知れないが、近い将来各県のがん登録に協力をお願いすることがあるかも知れない。そのときはどうぞよろしく願います。

編集後記

今回は平成12年11月にタイのコンケン市で行われた国際がん登録学会(IACR)をメインに構成しようと企画していたところ、大島先生から個人情報法制化に関する力の入った原稿を頂き、前回に引き続き巻頭を飾らしていただいた。IACRの報告はポスター発表で賞を獲得した小越先生にお願いした。学会終了後に同会場にて、「地域がん登録の精度向上と利用のための研究」(大島班)の班会議が開かれ、その時の写真を掲載した。岡本先生には9月に横浜で開かれた第9回地域がん登録全国協議会総会研究会ならびに実務者研修会のまとめの報告をしていただいた。研究班便りとして三上先生に大野班を紹介していただいた。昨年千葉県がん登録から離れられた村田先生には、今まで地域がん登録に携って来られてのご

苦労や思い出話をまとめていただいた。昨年の総会で地域がん登録に長年貢献されている方に感謝の意を伝える方法として、実務担当功労者の表彰制度が創設されました。その精度の概要について花井先生にまとめていただいたので、皆さんぜひ申請して下さい。最後に津熊先生から地域がん登録協議会会員を対象としたメーリングリスト解説の案内をいただいた。本号をもってニュースレター創刊時より編集委員を努めさせていただいた藤田は退任とさせて頂き、次号よりは岡本先生に主としてお願いすることになります。これまでご多忙の中、気軽に原稿を書いて頂いた諸先生方に深謝いたします。

(編集:藤田 学,岡本 直幸)